

ESPAÑA
EN
TOKIO'92

Ballet Lirico Nacional

スペイン国立リリコ・バレエ団 1992年 日本公演プログラム





MINISTERIO DE CULTURA
Instituto Nacional de los Artes Escénicos y de la Música

Sociedad General
de Autores de España



スペイン国立リリコ・バレエ団

1992年日本公演

Ballet Lírico Nacional 1992 Japan Tour

11月13日(金)7:00p.m.

Friday, November 13 7:00p.m.

11月14日(土)2:00p.m.

Saturday, November 14 2:00p.m.

11月14日(土)7:00p.m.

Saturday November 14 7:00p.m.



ESPAÑA EN TOKIO'92

主催：新大陸到達500周年スペイン委員会
スペイン大使館

後援：外務省
文化庁
スペイン文化省
スペイン産業・通商・観光省
コロンブス500年記念日本委員会
新大陸到達500周年スペイン公社
バスク自治州
スペイン著作権協会
産経新聞
フジテレビ
ニッポン放送
サンケイスポーツ
夕刊フジ
サンケイリビング新聞
日本工業新聞
扶桑社
社現代舞踊協会

協賛：本田技研工業株式会社
ソニー株式会社
近畿日本鉄道株式会社
株式会社竹中工務店

特別協力：日生劇場

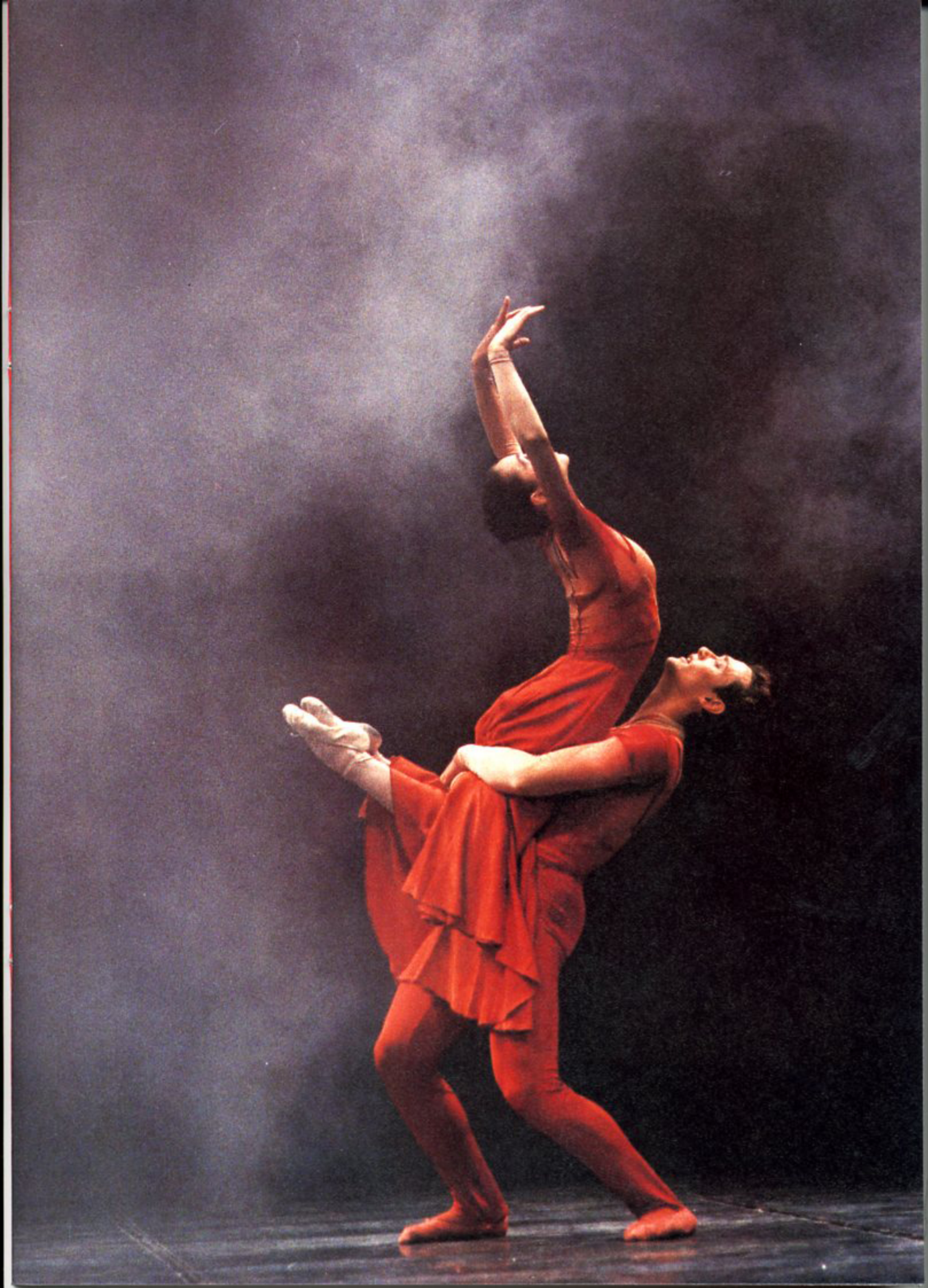
オフィシャル・エアライン：IBERIA 

招聘：メディア・エンタテインメント

企画：メディア・エンタテインメント

アルファ・ネットワークス

制作：メディア・エンタテインメント





Hace ahora quinientos años se produjo el descubrimiento de América y, consecuentemente, la globalización del mundo, lo que probablemente constituye la principal aportación de España a la historia de la humanidad. Por ello mi país ha querido conmemorar este evento de una forma muy especial. Se pretende, al tiempo que profundizar en todos los sentidos sobre el hecho histórico y su significado, mostrar al mundo cómo es la España de hoy, un país moderno y próspero, una sociedad democrática, con una larga historia y una cultura muy propia.

A través de grandes acontecimientos, como la Exposición Universal de Sevilla y los Juegos Olímpicos de Barcelona hemos acogido a millones de visitantes, que han tenido un contacto directo con nosotros. Pero también hemos querido estar presentes en países amigos, como es Japón, el antiguo Cipango que fuera uno de los objetivos de Cristóbal Colón cuando llegó a América en 1492.

Este festival de "España en Tokio 1992", que reúne diferentes manifestaciones artísticas y culturales españolas es una muestra del interés existente en mi país por profundizar en las relaciones con Japón, un país que se puede sentir orgulloso de conjugar la tradición y lo contemporáneo; una historia densa y milenaria con un brillante presente, caracteres que, como se podrá observar en el curso de este festival, creemos que comparte con la España de 1992.

Es para mí un enorme motivo de orgullo y satisfacción el presentar a ustedes esta compañía, integrada por jóvenes y entusiastas bailarines, liderada en la actualidad por una de las más brillantes figuras de la danza contemporánea como bailarín y coreógrafo, el español Nacho Duato.

Luis Yáñez-Barnuevo.

今から500年前に成し遂げられたアメリカ発見は、結果として世界のグローバル化をもたらしました。これは、スペインが人類史にもたらした恐らく最大の貢献であるといえるでしょう。そのため、我が国はこの偉業を特別の儀をもって記念することにしました。それは、歴史的事実とその意義を全ての観点から再認識すると同時に、近代化された豊かな国スペインの姿、長い歴史と固有の文化を有する民主国家の姿を世界に示すということです。

セビリア万博やバルセロナ五輪といった大きな祭典を通じ、私達は何百万人もの方々をお迎えし直接に接することができました。しかし、それだけではなく、数々の友邦に私達の国を紹介することもまた願っていました。1492年アメリカに到達したクリストファー・コロンブスが目指した古邦ジパング、つまり現在の日本もその一つです。

日本は、千年にわたる中身の濃い歴史と輝かしい現在に彩られ、伝統と現代性を調和させる見事な国です。そして、スペインの芸術と文化の公演が一堂に会するこの祭典『エスパーニャ・エン・トキオ'92』をご覧になれば、今述べた日本の特質はそのまま1992年のスペインを表し得ていることが理解されると思います。この祭典は、そんな日本との交流推進に我が国が大きな関心を抱いていることの証なのです。

ダンサー、振付家として現在のモダン・バレエ界で最も輝いている一人、ナチョ・デュートの率いるスペイン国立リコ・バレエ団は、若さと情熱に満ちたダンサーで構成されており、この度皆様にご紹介できることを誠に光栄と思います。

500年記念委員会委員長

ルイス・ヤニェス＝バルスエボ

La danza es un Arte que vive, es esencialmente algo del momento, aunque sea muy antiguo.

La danza es un Arte universal. Ciertos aspectos, posiciones básicas en particular, se pueden encontrar por todo el mundo. No tiene valor si no está basada en unas técnicas, y sólo cuando conocemos bien éstas, y las respetamos, podemos transformarlas de acuerdo con nuestras exigencias.

El arte de un bailarín se experimenta mientras se está bailando. Nada queda de su arte, excepto fotos, vídeos, memorias,... una vez su vida como bailarín se acaba.

Lo que tenga que aportar a la humanidad lo tendrá que hacer por medio de la danza. No lo puede hacer de ninguna otra forma y en ningún otro tiempo.

En esta ocasión es una satisfacción bailar representando a España ante un público cuya cultura, pese al alejamiento, comparte ciertas características con la nuestra: un fuerte apoyo en la tradición y la mirada puesta en el futuro coexisten como el folklore y la vanguardia lo hacen en las artes de ambas culturas.

El arte de la danza, además, comparte con vuestra cultura el amor a la disciplina, fuente de la libertad, y el disfrute de la belleza efímera.

Deseo que disfruten de nuestro trabajo igual que nosotros hemos podido disfrutar las artes escénicas, musicales, cinematográficas,... de Japón en nuestro país.



踊りは生きた芸術です。それはどんなに古い舞踊であっても、本質的にはその瞬時のものです。

踊りは全世界的な芸術です。基本ポーズなどの例に言えるように、世界共通の側面を持ちます。技術の積み重ねのない踊りは価値なく、技術を熟知し、遵守した時に初めて我々の望む舞いが生まれます。

一人のダンサーの芸術は舞いの続く間にのみ感受できます。写真、ビデオ、記憶を除けばダンサーとしての命が終わった時に何も残るものはありません。

彼がもし人類に何かを寄与出来るとしたら、舞いを通じてでしかなく、舞っている時に舞うことによるのみなのです。

遠く隔たる距離にもかかわらず我が国の文化とどこか性格の共通点を持つ国—日本でこの度、スペインを代表し踊れる事は光栄の至りです。すなわち、伝統への強い依存と未来へ向けた視点との共存が、フォルクローレ(民謡)とアバンギャルドがそうであるようにこの二つの国の芸術には共に存在するのです。

さらに舞の芸術は、自由の源泉となる規律への忠誠、そして、短命な美をいつも心という点において、日本の文化とわがち合うものを持ちます。

我々がスペインで日本の舞台芸術、音楽、映画等を楽しむ事が出来たように、我々の芸術を日本の皆さんにも楽しんでいただけるよう心から望みます。

芸術監督
ナチョ・デュアト



プログラム
Programa

カミング・トゥギャザー
COMING TOGETHER

振り付け	ナチョ・デュアト
Coreografia	Nacho Duato
音楽	フレデリック・ジェフスキー
Música	Frederic Rzewski
舞台装置とデザイン	ナチョ・デュアト
Escenografía y Figurines	Nacho Duato
照明デザイン	ニコラス・フィッシュェル
Diseño de Luces	Nicolas Fischtel

シナファイ
SYNAPHAI

振り付け	ナチョ・デュアト
Coreografia	Nacho Duato
音楽	イアン・ヘナキス/ヴァンゲリス
Música	Iannis Xenakis/Vangelis
舞台装置とデザイン	ウォルター・ノッブ
Escenografía y Figurines	Walter Nobbe
照明デザイン	エドワード・エフロン
Diseño de Luces	Edward Effron

アレナル(砂の台地)
ARENAL

振り付け	ナチョ・デュアト
Coreografia	Nacho Duato
音楽	マリア・デル・マール・ボネット
Música	Maria del Mar Bonet
舞台装置	ウォルター・ノッブ
Escenografía	Walter Nobbe
舞台デザイン	ナチョ・デュアト
Figurines	Nacho Duato
照明デザイン	エドワード・エフロン
Diseño de Luces	Edward Effron



スペイン国立リリコ・バレエ団

Ballet Lirico Nacional

振付け師及びバレエ・ダンサーとして高名なナチョ・デュアトが1990年6月に芸術監督に就任してから、スペイン国立リリコ・バレエ団の歴史は刷新した。デュアトが目指したのは、クラシック・バレエの規則を捨てることなく、そこに現代様式を盛り込んだ独自のバレエ団の形成である。それにより彼は、世界中のバレエ団の従来のレパートリーと、自らの斬新な振付けによる好対照なレパートリーを包括した。彼の卓越した振付け師の才能は、世界各国から高い評価を受け、又専門家からも絶賛されたが、そのことによってスペイン国立リリコ・バレエ団に貢献した力は、計り知れない。デュアトの先見の明は、振付け、バレエ、そして生活様式の程良い釣り合いを見出したことだ。彼にとって、スペイン文化とこの国の民族舞踊の財産は限りない魅力となっており、それが彼の仕事ぶりに大いに反映している。

スペイン国立リリコ・バレエ団は1979年にクラシック・スペイン・バレエ団として発足したが、その時の監督は、モーリス・ベジャールの20世紀バレエ団に長く席をおいたスペインの名ダンサーのビクトル・ウリャーテである。彼の時代にこのバレエ団は多くのバレエ・ダンサーと練習生を抱え、スペイン各地及び海外で公演を行った。

1983年2月に、当時バレリーナの巨匠として聞こえていたマリア・デ・アビラにこのバレエ団の運営が委ねられ

たが、彼女は内部組織を系統だてるとともに、振付けの重要性を説いていった。それによってジョージ・バラシンやアントニー・チューダーのような振付け師の名が、スペインにも知れ渡ったのである。しかしこのバレエ団は、こうした海外の高名な振付けの創造者ばかりに頼った訳では決してなく、自らのバレエ団の中からも振付け師を輩出した。

1987年12月に、今度はマヤ・プリセツカヤが芸術監督の座に就任した。ロシア人のこの名バレリーナは、クラシックのレパートリーを取り入れたが、中でもゴルスキーとメッセル振付けの「リーズの結婚」(マリウス・プティパ原案)は、世間の注目を浴びている。

これらの年月を通じてスペイン国立リリコ・バレエ団は幅広く活躍し、スペイン国内はもとより、日本、イタリア、フランス、オーストリア、ドイツ、スイス、キューバ、台湾、イスラエルの海外公演によって確固たる名声を築き上げてきた。

そして1990年、このバレエ団は独自の世界を掲げて、新たなスタートをきった。惜しめない賞賛の声をあつめる各批評、観客の熱狂的な拍手、そして数々の公演依頼などが、スペイン国立リリコ・バレエ団の国際舞台での未来を物語っている。



ナチョ・デュアト

(芸術監督)

Nacho Duato Choreography



1957年バレンシア生まれ。18歳でプロを目指してロンドンのランバート・スクールに入学。

引き続きブリュッセルのモーリス・ベジャールの主宰するムードラスクールで研鑽を積み、その後ニューヨークのアルビン・エイリー舞踊団にて腕に磨きをかけた。

1980年23歳の時、初の契約をストックホルムのクルベリー・バレエ団と結び、1年後にはジリ・キリアンに誘われてネザーランド・ダンス・シアターに入団。1987年にはダンサーとして、VSCDゴードン・ダンス・スプリッツより舞踊金賞を授与された。

また、ナチョ・デュアトの生まれながらの才能は、早くも彼をダンサーとしての域を越えさせ、振付け師としての活動も始まった。1983年、マリア・デル・マール・ボネットの音楽に振り付けた処女作「ジャルディ・タンカット」は大成功を収め、ケルンの国際ナショナル・コレオグラフィック・コンクール(国際振付けコンクール)で最優秀賞を獲得している。

「踊り儀式」(カルロス・チャベス)、「鳥」(レスピーギ)、「シナファイ」(ヘナキス&ヴァンゲリス)、「ボレロ」(ラヴェル)、「アレナル」(マリア・デル・マール・ボネット)、「マ

ダガスカル島民の歌」(ラヴェル)、「歓喜」(リヒャルト・ワーグナーの「ヴェーゼンドンク」の5つの詩)に基づくなど彼の作品のほとんどは、画家兼デザイナーであるウォルター・ノッブの着想と協力を得ている。

そして1988年デュアトはハンス・バン・マーネン、ジリ・キリアンらと共に、ネザーランド・ダンス・シアターの常任振付け師に任命された。

その後も彼は、スウェーデン国立クルベリー・バレエ、フランクフルト・バレエ、バレエ・ガルベキアン、レ・グラン・バレエ・カナディアン、スペイン国立リリコ・バレエ団など世界中のバレエ団の相次ぐ要求に答え、多くの素晴らしい作品を生み出していった。そして、それらの業績はデュアトの振付け師としての未来を確約するような、疑う余地のない道程となってきたのである。

1990年6月からは、スペイン文化省の招聘によりスペイン国立リリコ・バレエ団の芸術監督に就任し、このバレエ団のために次のような作品を創作している。

「マドリガル協奏曲」(ホアキン・ロドリーゴ)、「軍隊行進曲」(ベートーヴェン)、「虚無」(カレッジ)、「カミング・トゥギャザー」(フレデリック・ジェフスキー)



マリア・デル・マール・ボネット^(唄)

Maria Del Mar Bonet. Cante



マジョルカ島に生まれた彼女は、故郷への限りない愛をこめた詩情あふれる歌によって、スペインはもとより広くヨーロッパに多くのファンを抱えている。どこでも絶賛を浴びるその魅惑的な声は、地中海文化の中に根づいた音楽によって彼女独自の世界を描き出す。そして彼女の曲で見逃せないのが、長い年月に渡ってばかりだった封建社会への抗議である。何の罪もなく身を滅ぼされた友人や、過ぎし日の忘れ得ぬ愛。したがって彼女の歌にはこうした消すことの出来ない悲しみが常に漂っている。

1986年の夏、バルセロナのスペイン村の中にあるマジョール広場で行った平和を唱えるコンサートには、3000人以上もの聴衆が押し寄せ、彼女に共感を呼ぶ大喝采が沸き起こった。

バレエの振付け師として名高いナチョ・デュアトは、ボネットの歌に魅せられて彼女の曲に多くの振付けをしている。中でも1983年『ジャルディ・タンカット』はケルンの国際振付けコンクールで最優秀賞を獲得した。

1989年10月にはバリでネザーランド・ダンス・シアターと共演して成功し、イタリア、ギリシャの国々にも再登場している。

レコードを初め、マリア・デル・マール・ボネットの伴奏を務めるのがマジョルカのロンダーリヤ(ギター、ラウード、マンドリーナによる小合奏団)で、この同郷の仲間との呼吸の良さもボネットのたまらない魅力である。

スペイン国立リリコ・バレエ団 Ballet Lírico Nacional

芸術監督 Director Artístico

ナチョ・デュアト Nacho Duato

主な招待ダンサー Bailarines Principales Invitados

カトリーヌ・アラード Catherine Allard
 マール・ボードソン Mar Baudesson
 ジェニファー・グリセット Jennifer Grissette
 フランス・ニューイエン France Nguyen
 パトリック・ド・バナ Patrick de Bana
 マルコ・ベリエル Marco Berriel
 トニー・ファブル Tony Fabre

主役ダンサー Primeros Bailarines

カトリーヌ・アバスク Catherine Habasque
 カルメン・モリーナ Carmen Molina
 リカルド・フランコ Ricardo Franco
 ハンス・ティノ Hans Tino
 ラウル・ティノ Raúl Tino

ソリスト Solistas

マルタ・アルバレス Marta Álvarez
 ロサーナ・ブルゴス Rossana Burgos
 モンセラット・ガルシア Montserrat García
 アフリカ・グスマン África Guzmán
 エバ・ロベス・クレビジェン Eva López Crevillén
 マリア・ルイサ・ラモス M^a Luisa Ramos
 ソフィア・サンチョ Sofia Sancho
 ヨーコ・タイラ Yoko Taira
 ダニエル・アロンソ Daniel Alonso
 ルイス・マルティン・オヤ Luis Martín Oya
 ホセ・アントニオ・キローガ José Antonio Quiroga

舞踊メンバー Artistas del Ballet

ベロニカ・アルテス Verónica Altés
 カティア・アルテアガ Caty Arteaga
 ミレイア・ボンバルド Mireia Bombardó
 マリア・ルイサ・デルガド M^a Luisa Delgado
 マリーナ・ドンデリス Marina Donderis
 ヘマ・ガジャルド Gema Gallardo
 マリア・エウローバ・グスマン M^a Europa Guzmán
 マール・ジョレンテ Mar Llorente
 ベレン・モレノ Belén Moreno
 エステル・オリバ Esther Oliva
 ロシオ・ペラエス Rocio Peláez
 ブランカ・マリア・レチェ Blanca M^a Reche
 スサーナ・ルイス Susana Ruiz
 アドリアナ・サルガド Adriana Salgado
 マリア・ヘスス・タラット M^a Jesús Tarrat
 ホセ・アントニオ・ベギリスタイン Jose Antonio Beguiristáin
 ハビエル・カステージョ Javier Castillo
 エドゥアルド・カストロ Eduardo Castro
 アントニオ・フェルナンデス Antonio Fernández
 ホセ・マルティネス José Martínez
 フリアン・ミンゲス Julián Minguez
 セサル・モニス César Moniz
 ティノ・モラン Tino Morán
 フェルナンド・ナバハス Fernando Navajas
 アンヘル・ロドリゲス Ángel Rodríguez
 ホセ・ヴィセンテ・サレス José Vicente Sales

サンドラ・セイホ Sandra Seijo
 マルセラ・レナー Marcelle Lehner
 ジェニファー・グリセット Jennifer Grissette
 ホセ・マヌエル・アルマス José Manuel Armas

芸術助監督 Asistente del Director Artístico

ジム・ビンセント Jim Vincent

指導者 Maestra

イレナ・ミロバン Irena Milovan

再生装置 Repetidora

ハイルド・コック Hilde Koch

美術調整 Coordinación Artística

マベル・カブレラ Mabel Cabrera

ピアニスト Pianistas

フェルナンド・エンバー Fernando Ember
 ヘロニモ・マエッソ Jerónimo Maesso

理事長 Director Gerente

ホセ・アントニオ・ムニョス José Antonio Muñoz

製作 Producción

イサベル・サンチェス Isabel Sánchez

バレエ団理事 Gerencia de Compañía

ビクトル・アラнда Victor Aranda

運営 Administración

アンヘル・エレーロ Ángel Herrero

技術調整 Coordinación Técnica

ニコラス・フィッセル Nicolás Fischtel

放送 Difusión

アルバロ・サルミエンロ Álvaro Sarmiento

秘書 Secretaría

マリア・カルメン・ガリーゴス M^a Carmen Garrigós
 カロル・ウエルタ Carol Huerta
 マメン・デ・ホアン Mamen de Juan
 ファナ・レルマ Juana Lerma
 コンチャ・マルティネス Concha Martínez
 ラケル・メンデス Raquel Méndez
 ローラ・レビージャ Lola Revilla
 メルセデス・サソ Mercedes Zazo

受付 Recepción

ピラール・カンボス Pilar Campos
 イレーネ・マイネス Irene Mainez
 ベアトリクス・プリエト Beatriz Prieto
 ウーゴ・ペレス Hugo Pérez

舞台監督 Regiduría

ゴジョ・ヒメネス Goyo Giménez

装置 Maquinaria

マルセロ・スアレス Marcelo Suárez
 ルイス・ガルシア Luis García

電気 Electricidad

フロレンシオ・サンチェス Florencio Sánchez
 ルカス・ゴンザレス Lucas González

機器 Audiovisuales

ヘスス・サントス Jesús Santos
 ペドロ・アルバロ Pedro Álvaro
 ホセ・マリア・プリド José M^a Pulido
 ハビエル・カベージャス Javier Cabellos
 ラファ・ヒメネス Rafa Giménez
 イグナシオ・ロドリゲス Ignacio Rodríguez

小道具 Utilería

ホセ・ルイス・モラ José Luis Mora

管理 Almacén

レージェス・サンチェス Reyes Sánchez

舞台衣裳 Sastrería

イスマエル・アズナール Ismael Aznar
 ジェノベバ・ボン Genoveva Bon
 ファナ・クエスタ Juana Cuesta
 サグラリオ・マルティン Sagrario Martín
 マルガリータ・メディナ Margarita Medina
 ローサ・サンチェス Rosa Sánchez
 カルメン・デル・バジェ Carmen del Valle

マッサージ Masajistas

マテオ・マルティン Mateo Martín
 スサナ・マトゥット Susana Matut

MINISTERIO DE CULTURA

Instituto Nacional de las Artes Escénicas y de la Música

演目について



Coming Together

カミング トウギャザー

この作品は1972年にフレデリック・ジェフスキーによって、ナレータと楽器用に創作された。当初は二部に分かれて上演するように書かれたが、リピーティング音楽の歴史の中に極めて重要な内容をもつ曲である。この作品では、繰り返しのテクニックと曲の組み立ては最終目的とはなっておらず、ひたすら演劇と音楽の世界を創造するための手段として用いられている。

ジェフスキーはこの作品の中で、劇の要素が独創性に基づく音楽と1つの共同体を作り上げることによって、政治とイデオロギーを調和させようとした。

作品の始まりから終わりまで、1971年、騒乱のさなかアティカ刑務所で死亡した政治犯サン・マルビーリエの残した手紙を基にしている。そこから取り上げられたセリフが、初めは徐々に早口に、そして終わりに近づくにつれ、ゆっくりした口調で読みあげられる。尚、この曲のタイトルは、手紙の一部と、即興音楽のテクニックに関連して名付けられた。

11月13日 7時～、14日 7時～

ジェニファー・グリセット	Jennifer Grissette
カティ・アルテアガ	Caty Arteaga
マール・ボードソン	Mar Baudesson
アフリカ・グスマン	África Guzmán
カトリヌ・アバスク	Catherine Habasque
エバ・ロベス・クレビジェン	Eva López Crevillén
マリア・ルイサ・ラモス	Maria Luisa Ramos
ヨーコ・タイラ	Yoko Taira
ホセ・マヌエル・アルマス	José Manuel Armas
ホセ・アントニオ・ベギリストイン	José Antonio Beguiristáin
アントニオ・フェルナンデス	Antonio Fernández
リカルド・フランコ	Ricardo Franco
ルイス・マルティン・オヤ	Luis Martín Oya
ホセ・アントニオ・キローガ	José Antonio Quiroga
パトリック・ド・バナ	Patric de Bana
ラウル・ティノ	Raúl Tino

11月14日 2時～

カティ・アルテアガ	Caty Arteaga
ミレイア・ボンバルド	Mireia Bombardó
マリア・ルイサ・デルガード	Maria Luisa Delgado
カトリヌ・アラード	Catherine Allard
マルセラ・レナー	Marcella Lehner
エバ・ロベス・クレビジェン	Eva López Crevillén
エステル・オリバ	Esther Oliva
サンドラ・セイホ	Sandra Seijo
ダニエル・アロンソ	Daniel Alonso
ホセ・マヌエル・アルマス	José Manuel Armas
エドゥアルド・カストロ	Eduardo Castro
ハンス・ティノ	Hans Tino
トニー・ファブル	Tony Fabre
ホセ・マルティネス	José Martínez
セサル・アウグスト・モニス	César Augusto Moniz
アンヘル・ロドリゲス	Ángel Rodríguez





Synaphai

シナファイ

曲は、イアンス・ヘナキスのピアノ協奏曲。ナチョ・デュアトはこのバレエで、主に造形芸術を表現する振付けの思案をめぐらせている。抑圧、脅威、断絶などが、彼にひらめいたイメージで、そこでデュアトは個々の観点から見た、人間の感情を際立たせようとしている。

バレエは、三部から構成されるが、第一部では奇妙な声の混同が聞こえてくる。それはデュアト自身が書いた生と死に関する作品が、それぞれ異なる7カ国語の文章で一斉に読みあげられるため、8人のダンサーは其中でブロックとなって動く。そこに見られる古代エジプトの神官文字を描くような動きは、当時の美女たちの葬儀を表すレリーフを想い起こさせる。

第二部に入ってヘナキスの音楽が流れると、そのブロックは崩れだし、激しく絶望的な動きを伴って1人、2人、3人ずつの形に変化していく。踊り手たちは壁を目の前にした床で、あたかもそれぞれが自由を我がものとする願いを込めているかのように、無心で執拗な演技を繰り返す。

最後のヴァンゲリス作「天国と地獄」の音楽にのせたバ・ド・ドゥでは希望の道が開かれるがそれは嵐の後の静けさである。

このバレエでは、人間の持つ緊張感と悩みへの最終結論までは触れていない。個々の判断に任せるというのがここでの結論である。

11月13日 7時～、14日 7時～

カトリヌ・アラード
カトリヌ・アバスク
マリア・ルイサ・ラモス
アントニオ・フェルナンデス
ホセ・マルティネス
セサル・アウグスト・モニス
アンヘル・ロドリゲス
トニー・ファブル

バ・ド・ドゥ:
マール・ボードソン・ハンス・ティノ

Catherine Allard
Catherine Habasque
Maria Luisa Ramos
Antonio Fernández
José Martínez
César Augusto Moniz
Ángel Rodoriguez
Tony Fabre

Pas de deux:
Mar Baudesson, Hans Tino

11月14日 2時～

カティ・アルテアガ
ミレイア・ボンバルド
エステル・オリバ
ダニエル・アロンソ
ホセ・アントニオ・ベギリストイン
ホセ・アントニオ・キローガ
ルイス・マルティン・オヤ
ラウル・ティノ

バ・ド・ドゥ:
ヨーコ・タイラ、パトリック・ド・バナ

Caty Artega
Mireia Bombardó
Esther Oliva
Daniel Alonso
José Antonio Beguiristáin
José Antonio Quiroga
Luis Martín Oya
Raúl Tino

Pas de deux:
Yoko Taira, Patric de Bana



Arenal

アレナル 砂の台地

マリア・デル・マール・ボネットの歌から着想を得て、ナチョ・デュアトが振付けを行った作品。彼はここで、地中海社会の特徴である自由な喜びを、日常の様々な生活と対比させて表現しているが、そのコントラストは実に明瞭である。

まず一連の男女が対になって、自然な喜びを表す音楽のリズムに乗って踊り出す。その歓喜の表情は、カタルーニャ語とマジヨルカの方言に訳されたギリシア民謡に合わせて、明確な踊りのバ・ド・ドゥ、バ・ド・トロワ、バ・ド・カトルの中に反映される。

また一方の離れた位置では、女が合唱による4つの歌に乗せて1人で踊る。これらの合唱はリアリズムの世界を描くために、音楽の伴奏はつかない。

そこへ突然、心を張り裂くような叫び声が起こる。この彼女の踊りは、他のダンサーたちに比べてはるかに床に近い動きを示すが、それは大地からの影響、すなわち生活を表現している。



11月13日 7時～、14日 7時～

- ソロ : カトリーヌ・アラード
 バ・ド・ドゥ : ジェニファー・グリセット、リカルド・フランコ
 バ・ド・カトル : ミレイア・ボンバルド、マリア・ルイサ・テルガード、
 ホセ・マルティネス、ラウル・ティノ
 バ・ド・トロワ : アフリカ・グスマン、ルイス・マルティン・オヤ、
 ホセ・アントニオ・キローガ
 Solo : Catherine Allard
 Pas de deux : Jennifer Grissette, Ricardo Franco,
 Pas de quatre: Mireia Bombardó, Maria Luisa Delgado
 José Martínez, Raúl Tino
 Pas de trois : África Guzmán, Luis Martín Oya,
 José Antonio Quiroga

11月14日 2時～

- ソロ : カティ・アルテアガ
 バ・ド・ドゥ : ヨーコ・タイラ、アンヘル・ロドリゲス
 バ・ド・カトル : マール・ボードソン、エバ・ロベス・クレビジェン
 ホセ・アントニオ・ベギリストイン、
 セサル・アウグスト・モニス
 バ・ド・トロワ : サンドラ・セイホ、ダニエル・アロンソ、
 トニー・ファール
 Solo : Caty Arteaga
 Pas de deux : Yoko Taira, Ángel Rodríguez
 Pas de quatre: Mar Baudessón, Eva López Crevillén,
 José Antonio Beguiristáin,
 César Augusto Moniz
 Pas de trois : Sandra Seijo, Daniel Alonso,
 Tony Fabre

スペイン・バレエの流れーリコ・バレエ団の来日に寄せて

濱田滋郎(舞踊評論家)

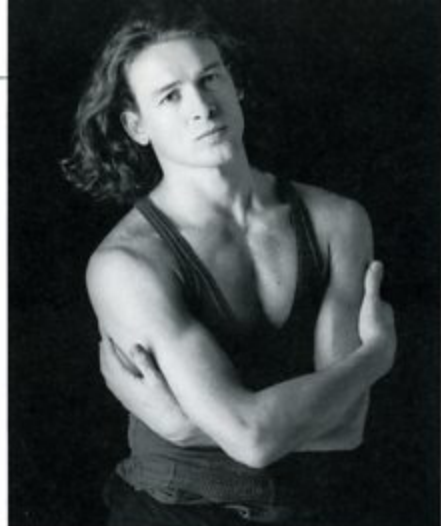
今夏スペインへ行き、観られる予定がなくなってしまって残念な思いをしたのだが、ナチョ・デュアト(スペイン語の通常の表記にしたがえば“ドゥアト”だろうが、彼は“国際人”なので、これでもよからう)については、かの地での評判も高く、「めったに出ない、カリスマ性をおびた人材」という声を聞いた。1990年にナチョが芸術監督となり、これを半いるようになってから、スペイン国立リコ・バレエ団は、また一段と新味を加え飛躍に向かったというのが定評である。

このバレエ団は、1979年に「バレエ・クラシコ・エスパニョール」すなわちスペイン・クラシック・バレエ団として発足を見ている。当初の芸

術監督はモーリス・ベジャールのもとで長く活動したスペインの名舞踊家ビクトル・ウリャーテで、その後女性の大家マリア・デ・アピラが1983年から、またロシアの名バレリーナ、マヤ・プリセツカヤが1987年から、このバレエ団を統率した。

ところで、スペインの舞踊界をフラメンコ一辺倒と早呑みしている方々には、「スペインのバレエ団」なるものが一向にピンと来ず、なにやら外国のまねをした、二流の存在ではないか、という気がするかもしれない。事実はこちら。第一に、スペインには、フラメンコ舞踊がきかんになる以前からの長い歴史を持つクラシック舞踊(スペイン語で「クラシ





コ」と称する)の存在がある。16~18世紀頃、ヨーロッパの宮廷舞踊として広く知られたものの中には、たとえばサラバンド(サラバンダ)、シャコンス(チャコーナ)、フォリーア、カナリー(カナリオ)などのように、スペイン(ないし、ポルトガルも含んだイベリア半島)起源のものがあつた。この一時からもわかるように、また16世紀にスペインは文字どおり世界一の強国であり宮廷も栄華をきわめた、という事実から察せられるように、往時のスペイン宮廷あるいは上流社会は、すでに独自の古典舞踊を発達させていた。また一方ではヨーロッパの国々に、とりわけフランスおよびイタリアとの文化の往来も繁く行われた結果、スペインには、汎ヨー

ロッパ的な古典バレエと関係を保ち共通の要素を持ちながらも、一方では独特な民族性を生かした、ひとつの様式が発達することとなった。とりわけ、18世紀の末頃、アントン・ボリーチェおよびセバスティアン・セレーツと呼ばれる二人の名舞踊家が開発、確立した(ボレロ)は、民族的舞曲のセギディーリヤを宮廷風に洗練したというべきもので、つづいて19世紀にはスペインのみならず、フランス、オーストリアその他、ヨーロッパ諸国でも大いに喜び迎えられた。1833年、パリへ出て3~4年を経たポーランド人のショパンが、スペインの地を知らぬまま、1篇の〈ボレロ〉を作曲しているのは、この舞踊の広い流行をものかたるひとつの証拠である。〈エスコレラ・ボレーラ〉(ボレロ派)という言葉も生んだほど、19世紀以降スペイン宮廷舞踊、古典舞踊の花形となったこのボレロでは、民族衣裳を初め、カスタネットの活用、独特な符割りを伴った快活なリズムとそれに伴う踊り手の足さばきなど、スペイン的な特色が濃く現れる。しかし同時に、この踊りが、フラメンコ(カ)の地方的民俗舞踊とは一線を画したものである、優雅な宮廷ないし古典舞踊の特質を保っていることも、また明らかである。

スペインの有名なダンサーの中には、たとえばグラン・アントニオやアントニオ・ガデス、女性ではバスター・インペリオやマリエンマのように、"クラシコ"とフラメンコの両道に秀でた者たちもいるが、本筋としては、あくまでも両者はべつなものである。1979年に発足した当時、このバレエ団はフラメンコに対する"クラシコ"の世界を代表するものであることを目指し、同時に汎ヨーロッパ的な意味合いにおけるクラシック・バレエをも視野に入れて、このジャンルのレパートリーやアーティストの振興、育成にも力を注いだようである。その中からまたモダン・バレエへの傾きもきざしてきたが、ナチョ・デュアルはこの方向をよりはっきりと打ち出し、スペインの"クラシコ"の長い伝統を消すことなく、却って巧みにそれを生かしながら、新しいファンタスティックな地平線を拓くことに成功した、と言われている。

このたびのプログラムも、イヤニス・クセナキス(ギリシャ)ほか現代的な作曲家たちの作品を使って独特な世界を展開するほか、マジョルカ島出身のすぐれた女性シンガー・ソングライター、マリア・デル・マール・ボネットを共演者に起用、地中海文化の明るさ、甘美さを強調する舞台を繰りひろげて、言うならば"民族の根"を忘れずにアピールすることが目立つ。スペイン舞踊界に対する私たちの認識を大きく回転させる、画期的な来日公演となることは疑いあるまい。



国立リコ・バレエ団—ナッチョ・デュアトとスペイン

市川 雅(舞踊評論家)

'89年の秋にハーグのネザーランド・ダンスシアターを訪れた時、ナッチョ・デュアトがスペインのリコ・バレエ団の芸術監督に就任するという話を聞いた。彼に関してはケルンの振付けコンクールで優勝したことは知っていたが、彼の振付作品を見たことはほとんどなかった。ネザーランド・ダンス・シアターはジリ・キリアンによって世界的なバレエ団になり、ほとんどキリアンの作品でレパートリーができていた。このバレエ団の日本公演で見た「墮天使」その他の作品はすべてキリアンのものであった。だが、キリアンはデュアトの才能を評価し、いくつかの作品を彼に作らせ、キリアンだけでは片寄ってしまうレパートリーに幅と変化をもたせようとした。その作品のなかに「アレナール」もある。「アレナール」がセビリヤで上演されると聞いて、早速セビリヤの古代ローマの遺跡に仮設された屋外劇場に行ってみた。マリア・ボネットの歌による作品で、デュアト独特の早い展開と疲れを知らない男女の群舞の熱気に溢れたものであった。ネザーランド・ダンス・シアターの前回の東京公演ではこの作品も上演されていたが、歌は録音されたものが使われており、今回はボネットも参加するので楽しみである。キリアンはデュアトに去られた穴を埋めるために、かつてネザーランドの振付け師であったファン・マンネンを国立バレエ団から呼び戻している。

スペイン内乱の記録映画「マドリーに死す」にアナキスト、ドゥルティのバロセルナにおける葬儀デモが映っている。女性達は喪服ながら、モダンな服装をして行進していた。ロルカの描く「血の婚礼」「ベルナルダ・アルバの家」に登場してくる禁欲的なそして抑圧された女性のイメージはそこにはなかった。バロセルナは違うのだ。ここにはモダニズムがある。だからこそフランコの王党派はここでは反革命的であった。それは私の直観であったが、多分正しかったと思う。カタロニアにはあらゆる分野でモダニズムが進行していたのだ。ピカソ、ダリ、ミロなど美術の分野にしても直接バリのエコール・ド・パリにつながっていたのである。このモダニズムの進行を遮断し、封殺してしまったのが王党派のスペイン内乱での勝利であった。真のモダニスト達は海外に亡命し帰らなかった。それほどにモダニズムを圧殺した権力への怨念は深かったのだ。アマヤのようなジプシーのフラメンコ・ダンサーもスペイン

には近づかなかったし、内乱の年に生まれたアントニオ・ガデスは口を開けば反動的なスペインを呪い、モンドリアンなどのモダニズム芸術家への憧憬を語った。

フランコの死後すでに長い年月が経っているが、やっと今モダニズムがふたたび開花しつつあるといえるだろう。それを決定的に感じさせたのがデュアトのリコ・バレエ団の芸術監督の就任であった。カタロニアのバレエ団ならそれほど驚くことはないが、マドリーのレジデンス・カンパニー、つまりスペインの中心に位置するリコ・バレエ団だからこそ画期的なのだ。マドリーにもモダニズムが忍び寄っている。かつてのリコ・バレエ団の芸術監督はアビラなどであったが、やはりフラメンコとスペイン古典舞の枠から抜けることはできなかった。一時ブリツセカヤが芸術監督をつとめたが、彼女はおそらくロシア・バレエの息吹きを感じさせるのが勢一杯だったろう。A・ガデス、C・オヨスも世界的に知られた舞踊家ではあるが、フラメンコの枠の中にある。スペイン人としてのアイデンティティはフラメンコにあるのだから、彼等の創作フラメンコは必然的なもので、否定することは出来ない。

去る9月にフランス・リヨンで第5回ダンス・ビエンナーレがスペイン特集「スペインの情熱」というタイトルで開かれ、スペインを題材にした作品を含む30公演を見たが、ホセ・アントニオのナショナル・バレエ団は、「月のロマンセ」などフラメンコを基盤にした創作を出し、エル・ファルコ、アナ・アマヤなどはフラメンコそのもの、クリスチーナ・オヨスはロルカの「イエルマ」を出して来た。一方、ほとんどカタロニア勢だが、フランスのヌーベル・ダンスと共通する手法を使っている前衛的な現代舞踊があり、ヴィセンテ・サエズ、ムダンス・カンパニー、ジルベルト・アゾバルディなどが参加していた。特にマル・ペロ舞踊団の「南の犬」、アゾバルディの「ベルモンテ」はいかにスペインらしいソセテックな肉体を駆使しながら、伝統的な舞踊を排し、この国のモダニズムの方向を示唆しているようで興味深かった。モダニズムとフラメンコのコントラストと距離を保ちながら、スペインの現代舞踊は進んで行かなくてはならないだろう。その鍵を握っているのはマドリーに本拠を置いて活動し始めたナッチョ・デュアトだろう。



